

そして、比企谷八幡と雪ノ下雪乃は。

笹木 たける

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

比企谷八幡の『本物』を求める発言から  
雪ノ下雪乃の『本物』への想いを自分なりの解釈で。

話は原作9巻

アニメ「やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。続」9話辺りから進んでいきます。

完全なオリジナルストーリーとなりますので、抵抗のある方はここでブラウザバックを推奨します。

それでは、少し私の妄想にお付き合い下さい。

目次

プロローグ	1
第一話	4

## プロローグ

——【いつか、私を助けてね。】

そう、雪ノ下雪乃に言われた時に、俺はある種の勘違いをしていたこと。そして、上手く言葉には出来ないのだが、新たな想いを胸に抱くことになる。

今まで俺は多分、少なからず多からず『雪ノ下雪乃』という人物に憧れや勝手な理想を抱いていたのだと思う。時には嫉妬もした。

だが、本当は違かった。外面を取り繕った雪ノ下雪乃は本当は他と変わらない一人の女の子なのだ。

俺は以前、『本物』が欲しいと言った。俺の本物とは『他人を理解し、自己満足を押し付け合い、許容できる関係』そして、雪ノ下雪乃の『本物』とは恐らく『言葉にしなくてもお互いを理解し合える関係』なのだと思う。

言葉にしないと分からないことは沢山ある。

だが、俺は、コイツと、雪ノ下雪乃と、言葉の必要の無い。『本物』の関係になりたいと思っっているのではないだろうか。

※ ※

あれから俺らの関係が変わったかと言われれば、少しだが、今までよりも本音を言い、分かち合えるようになった…と、思える。

そんなある日の休日。

「お兄ちゃんー？小町どうしても千葉駅付近の本屋に売っている参考書が欲しいのですー。明日昼前に行って買ってきてね！」

唐突すぎるだろ…。だが、予定も無いし家の妹様には逆らえない。

「俺に拒否権無しかよ…。まあ、わかったよ。」

そして、翌日。時刻は朝十時を回りそうだ。

「それじゃ、小町。行ってくるな。」

「お兄ちゃん？まだいたの!?!早く行ってよ!!」

…え？本当に酷くない？

急かされ、俺は急ぎ足で駅への道を辿った。

しかし、偶然か必然か。

「遅かったわね。」

そこにいたのは待ち合わせをしていないのに待ち合わせをしたような口振りをした。雪ノ下雪乃がいた。

「あ、いや…。俺の勘違いか？俺は小町に頼まれて参考書を買いに来たんだが…」

「あら、私は小町さんからこのような連絡を受けているのだけだ。」

そう言い、俺に携帯の画面を見せてくる。そこには小町からのこのようなメールが書かれていた。

《雪乃さーん。明日千葉駅付近の本屋に売っている参考書が欲しいので選んで来て貰えませんか？当日はお兄ちゃんも向かわせますので！二人でいいのをお願いします!!》

まだ下に何か書いてあるような気がしたが、俺がある程度読んだのが分かったと雪ノ下は携帯をしまつてしまった。

本当に我が妹様は人を、主に俺を振り回す…。

「それでは、いつまでもこんな所においても仕方が無いし、行きましようか。」

そう言って雪ノ下は歩き出してしまった。俺もその後を追うような形になる。

程なくして本屋に着いたのだが、こんな洒落た本屋があったのか…ここ千葉だぞ…。本屋は外観はそこまでだったが、内装に凝っていたようで、かなりモダンな雰囲気になっていた。雪ノ下も初めての来店らしく、中を見てはこんなお店があったのね…等と呟いている。考える事は似たり寄ったりか。

さらに、中にカフェまで付いており、買った本をその場で読めるといってお得な機能も付いていた。

程なくして小町への参考書も選び終わったので、さて帰ろうか

など考えていたら

「比企谷くん、折角きたのだし少し本を読んで行きましようか。」

と、まさかの申し出があった。ここで俺が帰ると言いようならば数々の罵倒の後何が待っているかが分からないのでここは素直に従っておくべきなのであろう。

∴言いつつも、もう少しコイツと居たいと思ってしまったのは何故なのだろうか。

## 第一話

結局俺たちはお互いに読んだことのある本を一冊選び、それを手に読ませて感想を語り合う。という事になった。発案者はもちろん雪ノ下である。

「そろそろ選び終えたかしら？くれぐれも変な本は読ませないで頂戴ね」

「当たり前だ。まずこの場でラノベとかシリーズ物をチョイスするのは間違ってるだろ…」

そう。相手が材木座とかではなく雪ノ下であることだし、長居する訳にもいけないのでここはそこまで長くもなく、且つ分かり易い本がベストであろう。

程なくして、席に着きコーヒーと紅茶を注文。お互いの本を渡しあつて読み始めた。

※ ※ ※

そうして時間は進み、しばらく読み進めて来たが、これがなかなかどうして面白い。俺が雪ノ下に渡したのは推理小説モノで、逆に渡されたのは短編の恋愛モノ。こいつこんなものを読んだことがあったのか…と初めは驚いたがどちらかと言うと主人公とヒロインのお互いの心境描写が強く描かれており、かなり物語に入りやすい本だった。

俺は目を上げ、雪ノ下の方を向いて様子を確認してみようと思いついてみてみたのだが…なんとというか、綺麗、だった。

雪ノ下の本を読んでいる姿は部室で何度も見ているし、そこまで何かを思う事はなかったのだが、正面からとか、場所が違うからとか、そのようなものではなくて。ただ俺は、その瞬間、一体何秒かは分からないが、雪ノ下雪乃に見惚れていた。

「何かしら。あまりジロジロ見られるとその、気が散るのだけれど」「す、すまん」

どうやら俺の視線はあつさりとバレていたらしい。コツソリと見ていたはずなんだがな…。

そうして数時間が過ぎ、静かなカフェに二冊の本を閉じる音が響いた。最初に口を開いたのは、俺。

「どうだった？」

「推理小説にしては犯人が分かり易すぎたけれど犯人への到達の経緯が細かくて面白かったわ。そっちは？」

「ああ、お前もこの系統を読むんだなって思った。ヒロインの想いがハッキリしていて良かったと思う。俺には一生無さそうな体験だろうけどな…」

「まあ貴方はそうでしょうね。ヒキガエルくん？」

クスクスと楽しそうに言われれば俺も何も言い返せない。楽しそうならそれでいいのだが。

「さて、こんな時間になってしまったけれどお昼はどうする？」

言われてみれば時刻はすでに昼過ぎを回っており、意識した途端腹が空いてきたような気がする。

「サイゼでいいんじゃないか？」

すると雪ノ下は「はあ…」とため息をついている。美味いじゃないぜ。

「貴方に聞いた私も馬鹿だった気がするけれど…いいわ。私の家で済ませましょう」

爆弾発言である。俺。少し混乱中。

「いいのか？その、家でご馳走になるなんて」

「本当なら貴方のような犯罪者予備軍を家に招くなんてしたくないのだけれど、今日は気分が良いから許可するわ」

雪ノ下は笑顔でそう言うもので、俺にはご馳走になる選択肢しか無かった。

そうと決まれば、店を出て雪ノ下家への道を並んで歩く。修学旅行の時はあんなに離れていたのに、本当に今日は機嫌がいいらしい。

※ ※ ※

しばらく歩き、何度か訪れた雪ノ下のマンションへとたどり着いた。



道中、今日の雪ノ下雪乃の事を何度も考えていたことは、誰にも言えない秘密である。